

第7回外国語ワーキンググループについて

2016年3月22日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

10:00から12:00まで文部科学省15F特別会議室で行われた。
一般傍聴者は30名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 外国語教育の改善充実について
 - ① 小学校部会における審議の報告
 - ② 英語以外の外国語教育について
 - ③ 学習評価の観点の在り方について
 - ④ 外国語教育におけるICT活用について
2. その他

まずは①について事務局より小学校部会における審議の報告があった。ワーキンググループと並行して小学校部会においても「論点整理」を踏まえた議論がなされている。

「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、学習の基盤となる言語能力の育成は重要であると考えられており、国語・外国語が連携する必要がある。また、「カリキュラム・マネジメント」の考え方により、各学校における柔軟な時間割設定を可能にしている。

外国語教育においては、中学年で「外国語活動」が導入され、高学年では教科として外国語を学ぶことになる。このため授業時間は年間35時間の増加となり、短時間学習やICTなどの活用を推進する。これに合わせた教材の開発は平成30年度に配布できるよう行うことが求められ、指導体制の充実が必要とされている。

この報告について、委員からコメントがあった。

年間70時間の必要性に関する議論は不十分であり、「カリキュラム・マネジメント」の名のもとに、対応を各学校に任せきりにせず、未学習や学力差が生じないような対策をするべきだ、とのことであった。

10:30頃より②についての説明があった。

現在、708校で英語以外の外国語教育が行われているが、教材研究は共有化されておらず、支援が必要とされているという課題がある。

英語以外の外国語教育を進めることについて、委員は賛成の意を示したが、特に地方においては指導できる人材を確保することが難しく、教員養成・確保の制度設計が必要である

と述べた。

10:40 頃からは、③についての審議になった。

学習評価については総則・評価特別部会で議論が行われており、前回のワーキンググループで報告があったように、新学習課程では4観点から3観点での評価に変更となる。

外国語活動そのものがコミュニケーションを主に対象としているため、外国語における「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を区別することが難しいようで、CAN-DO リストと呼ぶ指標形式の目標とも関連付ける必要があり、現場が混乱しないように具体的にわかりやすくしなければならないとの意見があった。

事務局からは観点別評価と CAN-DO リストの関係性を整理してほしいとの要望があった。

11:30 頃からは④について議論が行われた。

ICT の活用方法を議論する前に、ICT 機器の配備に市町村格差があるという現状を訴え、活用促進することで格差が拡大すると反対する委員があった。

一方で、4 技能の側面からタスク実行の媒体として有効である上に、学習プロセスのモニタリングや検証にも使用できる可能性を提案する委員もあった。

次回は4月26日（火）10:00～12:00、文部科学省3階1会議室にて開催予定である。

さらに5月の第9回ワーキンググループで一旦議論をまとめる。